基礎教育(読み・書き・計算)の大切さを考える

―開倫塾は、法務大臣表彰を授与されました―

開倫塾
塾長　林　明夫

Q：開倫塾は、法務大臣表彰を受けたそうですね。なぜですか。

A：はい。受賞の理由は、「矯正教育」に貢献したことだそうです。具体的には、

①栃木県栃木市にある栃木刑務所で、開倫塾の先生方が、15 年間に 600 回、受刑者の皆様に「読み書き計算」などの「基礎教育」や「高卒認定試験ための英語指導」などを行ったことです。

②その結果、参加したおよそ 100 名の受刑者が、まだ一人も刑務所に戻ってきていない、再犯率ゼロだそうです。極めてありがたいことと、心から感謝しております。

Q：どのような経緯で、この受刑者教育が始まったのですか。

A：(1)15 年以上前に、栃木県総合教育センターで、栃木県各市町の教育委員の研修会があり、講演。慶應義塾大学法学部法律学科で、宮沢浩一先生の刑事政策のゼミに入り、刑務所・少年院・医療刑務所など矯正施設を視察。その際、「刑務官の皆様から、学校や家庭、社会での教育の大切さを教えていただいた」ことをお話しました。

(2)そのことを覚えていてくださった、栃木市教育長様が、女子専門の刑務所、栃木刑務所の所長様から、「読み書き計算」など「基礎教育」が不足している「受刑者」の教育のために先生を派遣してもらいたい旨の要請があった時に、私のことを思い出して、ご紹介いただいた次第です。(学校の先生方にお願いしたら、受けてくれなかったようです)

(3)大学時代に刑事政策を学んだ「法学徒」としては、刑務所で受刑者教育にご協力させていただくことは名誉なことと快諾。早速、開倫塾の先生方とご相談。参加の受刑者の皆様がよくわからないところまで遡り、読み書き計算の指導を、15 年前から、月に何回かスタート。最近では、高卒認定試験の指導、好評のようです。

Q：林さんも何か教えているのですか。

A：この 15 年間、毎年 1 ～ 2 回、開講式や修了式の際に、20 分程度の講話をさせていただいております。

Q：林さんは、どんなお話をしているのですか。

A：(1)まず第一に、「自覚をもって学ぶこと」「効果の上がる学習方法」、「学び方を学ぶこと」の大切さをお話しています。特に、復習の仕方、定着(音読練習、書き取り練習、計算・問題練習)の仕方をご説明。

(2)続いて、「よく意味のわからないことば」に出会ったら、「気持ちが悪い」と考えて、「辞

書」を用いて調べること。調べた語句は、読む練習(英語なら発音練習)、書き取り練習をして、その語句が使われている文章と一緒に覚えてしまうこと。「ことばは力」だからです。

（3）「新聞」を、毎日、一面から舐めるように、丹念に読み、社会の動きを知ること。「これはちょっとおかしいのではないか」と「自分で考える力」、「批判的思考能力」を身に着けること。(刑務所でも新聞を読むことができるからです)

（4）毎日、たとえ 10 分でもいいから「本を読む」。「読書」に励む。本は、じっくり、腰を落ち着けて、「作者と時空を超えた対話」をするようなつもりで、ていねいに、一語一語かみしめながら読む。本は最後まで読む。これぞという本は、5 ～ 6 回読む。気に入った作家の本は、刑務所の図書室にあるものは、全部読む。

（5）「刑務所内の図書室」には毎週行き、「図書室に慣れ親しむ」。

（6）このようにして、刑務所にいる間に、「辞書」「新聞」「読書」「図書室」に慣れ親しみ、学習習慣にする。そして、すべての勉強の基礎となる、「読解力」を身に着ける。

（7）そして、社会に出た後は、「公共図書館」に、毎週何回か出掛け、自分の「居場所」にする。図書館に出掛けて、「辞書」「新聞」「読書」に慣れ親しみ、「学び続け」、「充実した人生」を送る。公共図書館にある「全集」にも挑戦する。一生かけて学び続け、「多様な選択肢のある人生を歩む」。「正常に機能する社会の形成に貢献」、「社会のお役に立つ」。

○このようなお話を、毎年、させていただいております。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：少年院や刑務所などで、「基礎教育」が身に着いていない受刑者や、高卒認定試験の受験を希望する受刑者への教育指導は、極めて教育の成果が高く、再犯防止に役立ちます。同時に、犯罪のない、明るい社会づくりに役立つと考えます。是非、ご協力ください。また、都市化が進めば進むほど、「保護司」の確保が難しくなっているようです。「矯正教育」にご関心のある先生は、ぜひ、保護司会や保護観察所にお問い合わせください。

○大学の時に学んだことが、このようなことで社会のお役に立ち、とてもありがたく感謝しています。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も、本格的な読書の秋を迎え、先生方がお読みになれば、必ずお役に立つ本をご紹介いたします。

（1）一冊目は、内村鑑三著「後世への最大遺物・デンマルク国の話」と「代表的日本人」、いずれも岩波文庫、岩波書店刊です。自分が死んでから後の世(後世)に遺せる最大の物(最大遺物」は何か。デンマークの帰還兵、ダルカス君、日本の西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮上人のお話を、内村鑑三先生は、およそ 100 年前、英語で欧米に紹介。その日本語訳です。

（2）二冊目は、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)作「東の国から」岩波文庫と、同作「日本の心」講談社学術文庫です。100 数十年前に、日本の思想・文化を英文で欧米に紹介したものです。せっかく NHK 朝のテレビドラマで「ばけばけ」をご覧になるのなら、小泉八雲の作品も、じっくりお読みになり、日本とは何かを考えるのも一興、趣深いと考えます。

（3）三冊目は、外交官の河東哲夫大使著「『自由と民主』の世界史、失われた近代を求めて（Ⅰ）（Ⅱ）」藤原書店、2025 年 6 月 30 日刊です。世界史を一度学んだ人はもちろん、世界史を今学んでいる人、世界史をこれから学ぼうとしている人の最適のテキスト。絶えず、ロシアのウクライナ侵攻、イスラエルのガザ侵攻、米中ロの最先端の外交を念頭に置き、考えを巡らせ、執筆。手に汗握る、世界史のテキストです。

（4）四冊目は、同じく外交官の色摩力夫大使著「国際連合という神話」PHP 新書、PHP 研究所、2001 年 9 月 28 日刊です。日本ではほとんど論じられていない「国際公法」特に「戦時国際法」の内容を、国連を通してわかりやすく解説。

○名著、同著、「オルテガ、現代文明論の先駆者」中公新書、中央公論社 1998 年 9 月 28 日刊と合わせてお読みください。

（5）ようやく五冊目です。寺島実郎著「世界認識の再構築、17 世紀オランダからの全体知」岩波書店、2025 年、9 月 5 日刊です。なぜ、江戸幕府は、スペイン・ポルトガルを遠ざけ鎖国、オランダを選んだのか。なぜ、オランダの繁栄の後、イギリスの繁栄がもたらされたのか。ポルトガルとスペインのラコンキスタと、オランダの歴史を知らずして、この謎を解くことはできません。寺島先生、渾身の作品です。フリードリッヒ・シラー著「オランダ独立史（上・下）」岩波文庫、岩波書店、1949 年 8 月 15 日・12 月 20 日刊で、より深い理解を。

（6）六冊目は、唐鎌大輔著「弱い円の正体、仮面の黒字国・日本」日経プレミアシリーズ、2024 年 7 月 9 日刊です。円安が進むなら、エネルギー需給率、食糧自給率を高めることを考えなければ、国民生活は苦しくなるばかりか、国家が立ち行かなくなること必然。円安は、豊かな観光客や優秀な留学生を呼び込む絶好のチャンス。大学はもちろん、全国の中学校・高校は国費留学生を激増させ、大学にまで進学させ、定員不足を解消、知日派・親日派を増やすべきと、本書を読み考えました。

○日本は、世界は、どこに行くのか。自分はいったい何を目指すべきか、参考になる六冊です。秋の夜長、是非、一語一語、ご熟読を！

＜お知らせ＞

「11 月第三木曜日」は、国連が定めた「ユネスコ世界哲学の日」です。開倫ユネスコ協会では「ユネスコ世界哲学の日」記念講演会を、11 月 20 日（木）13 時～ 15 時まで、足利商工会議所 4 階わたらせホールで開催します。同日、同会場で、午前 10 時から 11 時 30 分まで、開倫塾日本語学校 10 月生入学式もあります。ぜひ、ご参加ください（参加費無料、誰でも OK です）。

（2025 年 10 月 12 日記）